

ふる里の歴史を編みし師の君は少し残して旅立ちにけり

ハイハイ羽柴ですこの声すでに今はなし電話帳の文字静かに見入る

秋深し佐伯の里に偉人消ゆ

銭に信仰の強さ世に贈る

竜護寺に気高く生きた稀有の人

「故羽柴副会長をしのぶ会」に参加して十一月十七日師を語る会に集いて聞きたれば指示うけしこと皆語りおり

人を愛し自然を愛し師は逝きぬ独歩の碑完成待たず

へだてなく太陽のごと暖かし人の心に影を宿せり

もう居ない聞きたきことの多かりしに

先生は短歌より俳句が好きであられた。そして、どんな人の愚作でも心で聞き、先ず新鮮な例を示して下さる。そんな方であったと思う。 合掌

## 活字印刷本に変わる前後

塩 月 佐 一

(会員・佐伯市匠南区)

私は史談会に入会してまだ七年と日は浅い。

昭和五十年三月学校を停年退職すると、引続いて佐伯教育事務所社会教育指導員として勤め、全く未経験の文化財行政の事務を取扱うことになった。そこで先任者の助言により、史談会の協力を仰ぐために、はじめて羽柴先生を訪れ、御援助をお願いした。先生は「一緒にやりましょうや」と暖かく迎え入れて下さった。

それ以来、史談会の催には、事情の許す限り出席して御指導を仰いだ。

私は美術品を見るようなきれいなガリ版刷りの『佐伯史談』を、待遠しい思いで毎号の発行を待った。新しい

史談誌が来ると、私のくせで先づ第一に表紙を眺める。そして目次に目を通すと、一枚一枚めぐりながら見る。

そして最後の事務局だよりから読みはじめ、編集後記を読む。そして改めて本文にかえる。編集後記を読むと先生の苦労の程が実によくわかる。

ところが五十四年の二月発行の第一一七号の編集後記に気になることが記された。それは

。ヤスリ板は今度新調して好調であるが、手加減が平均せず、眼もつかれ易く、その上インキの調子もうまくいかず（以下略）（以下傍点塩月）

こんな後記ははじめてである。次の『佐伯史談』第一一八号（五月八日発行）の編集後記にも

。たいてい眼は眼鏡をかけさえすれば平気であったが、この頃は疲れる。それにこんなに書く右手の指先のはたらきが、どうも不正確になって、字体、字面に乱れが出て、印刷して見るとまずいところが多くなつた。いづれにしてもこの辺が、私の謄写印刷の限

界であらう。

素人の私には今日見てもきれいな印刷であるが、先生は指の動きに不安を感じられて来ておられる。

次の八月六日発行第一一九号の後記には、今読み返してみると涙がにじむような一節がある。

（前略）それはそれとして、今度はおわび。原紙きりから印刷まで時日が長伸び、加えてこの暑気で、印刷のすり上り極めて不良、特に29・30両ページがよくない。入念にやってこれである。

文字にしてもその通り、老眼昂進のせいか、まず字画が不正確、どうもきちんと書けない。きれいな楷書を目指しているが、手先きがうまくいかない。

編集・印刷・製本にしろ、光栄ある謄写印刷機関紙の、この姿は守りきりたいのだが。（後略）

昭和三十三年『郷土史跡』第一号以来二十一年に及ぶ類例のない独得の風雅な謄写印刷誌である。守り続けたいと言われる先生のお気持が痛いように伝わる。

五十四年十月二十一日発行第一二〇号の後記には

。この「佐伯史談」の原稿きり、つまり原紙に一字一字書くことは、気のつむ作業で、老令のせい、か、眼精が疲労する。右手がつかれて、思うように字画が書けないところができる。これも歳のせいであろうが、時間がものすごくかかる。

でも、今号のように充実した原稿だと、きることが実にたのしく、学びつつ一字一字克明に書くことは実に楽しい。……中略……

。今年度は十二月までに、もう一回この印刷で発行したい。長編可、短くても可、十一月中に原稿をどうぞ（羽柴）

とある。先生は遂に『佐伯史談』の活字印刷への切替時機は来年からしよう。と重大決意をなされたようである。この重大決意をされるまで、どんなに悩まれたことであろう。私達はその悩みを後記の一字一字から読みとることができる。

最後の謄写印刷『佐伯史談』第一二一号を十二月十四

日発行されると、先生は史談会の事務を三分して私達に託され、「身勝手に相すまないが史談会の方はしばらく休養させて貰って、『本匠村誌』の編集に全力を結集させてほしい」と言われた。

先生は体の衰えを直感されたのであろう。

「私のライフワークとして、私の生まれた故郷の『本匠村史』は是非完成したいから、すまないが頼む」とも申された。

昭和五十五年四月二十日、活字印刷による『佐伯史談』第一二二号ができると先生は大変喜んで下さった。

後日奥様のお話によると「『佐伯史談』はもう心配することはない。よい人達に頼んだものだ」と喜ばれたという。しかし時折「ガリ切りがなくなって淋しくなったな」と漏されたという。

昭和三十三年「郷土史跡」第一号以来通算百四十三号二十一年間、毎晩毎晩ガリ版より手を離れたことではないという先生の、しみじみとした述懐であろう。

間もなく六月、先生は第一回の入院をなさった。「いい時機に活字印刷に切り替えたものだ」とも言われた。